

[史料]

アウクスブルク市の支配を夢みた人物、 ペーター・エゲン (1413 – 51 年) について (3)

「ブルッカルト・チンクの年代記 (1368 – 1468 年)」より

山 本 健

On Peter Egen, Who Failed in
Ruling the City of Augsburg (1413–51) (3)
— *Chronik des Burkard Zink, 1368–1468* —

YAMAMOTO Takeshi

アウクスブルク市の支配を夢みた人物、 ペーター・エゲン (1413 – 51 年) について

目次

- | |
|---|
| I はじめに——ペーター・エゲン事件の意義について |
| (1) その意義について——パクトビルガートゥーム
(Paktbürgertum) との係わりで |
| (2) 史料から見えるチンクとペーター・エゲンの関係 |
| II テキストの邦訳 |
| 第1章 ペーター・エゲンの生い立ちとその人柄の変化 |
| (1) エゲン家について |
| (2) 若きペーター・エゲンの人柄と市長職への就任 |

- (3) 市長職を重荷と感じ始める若きペーターの苦悩
- (4) 国王フリードリヒ3世との出会いと
変わるペーターの性格

第2章 ペーターの「市民権の返上」事件と ツンフト親方層・市参事会の反応

- (1) 個人の権利を追求するペーターと
彼の奇策「市民権の返上」
- (2) ツンフト親方たちの困惑と慰留願い
- (3) 市参事会員たちの猜疑心とペーターの本心
- (4) ペーターの狙い——自由〔特権〕証書の獲得とその内容
- (5) 市参事会の対応についてのチンクの見解

〈以上、第32号（2019年3月）掲載〉

第3章 都市共同体の秩序と「個人」の自由との軋轢「事件」

〔A〕子どもたちの「結婚」をめぐる有力家の対立 ——ペーターへの反撃の始まり

- (1) アウクスブルク市での
『ロメオとジュリエット』問題の発生
- (2) 「恋愛結婚」をめぐる両家の対応
- (3) 「結婚の誓い」をめぐる裁判での
誹謗中傷に傷つくペーター

〔B〕有力市民にとっての市長職の実態と市参事会の関係

- (1) あらぬ疑惑に立腹するペーターと
再度の「市民権の返上」宣言
- (2) 政務多忙なわりに実入りの少ない市長職への
不満と批判
- (3) 市長在任中の刑の執行回避要請を無視され、
都市から退去（1450年11月）

第4章 市参事会の侮蔑的な要求と新たな法廷闘争

〔A〕騎士団の介入とアウクスブルク市との仲裁交渉

- (1) 聖ゲオルク騎士団を頼ったペーターと
ギュンツブルク会議
- (2) ミンデルハイム会談での仲裁交渉 (1451 年 11 月 29 日)
- [B] 仲裁案を台無しにした「言葉 (ガスト: Gast)」から
法廷闘争へ
- (1) ガストとして公的宿屋への要請とメンツの問題
- (2) ペーターによるブランデンブルク辺境伯の
ラント裁判所への告訴
- (3) アンスバハ・ラント裁判所での審理とその意外な結末
- (4) アウクスブルク市による宮廷裁判所への
上訴とその判決

〈以上、第 33 号 (2020 年 3 月) 掲載〉

第 5 章 ペーターの死とその後の裁判の行方とチンクの感慨

- (1) ペーターの死 (1452 年) とその死因
- (2) ペーターの遺族たちの裁判継承の根拠
- (3) この訴訟合戦についてのチンクの感慨
- (4) 「評伝」: F・フレンズドルフによる
ペーターの外交活動

〈以上、本号〉

〈以下、次号〉

第 6 章 遺族たちの新たな法廷闘争 (1452 - 59 年) と和解 (結審)

- (1) 皇帝の宮廷裁判所での審理と
「ランと裁判所への差し戻し」判決
- (2) アンスバハ・ラント裁判所での再審理

注記

索引

〈タイトルは暫定訳〉

- (注記) ①訳文の〔 〕内の日本語は、理解を容易にするために訳者が補充したものであり、()内は原語である。
- ②各章内の小見出しも、同様な趣旨から訳者が書き加えたものである。
- ③当該テキスト〔「ブルッカルト・チンクの年代記 (*Chronik des Burkard Zink, 1368-1468*) の第4巻 (Das Buch IV, 1416-1468)」、196-207ページ。「かつて、ペーター・エゲンと呼ばれたペーター・フォン・アルゴンについて」(Von Peter von Argon, die vor Peter Egen hieß)〕で断片的にしか記されていない内容で、他巻や付録に詳論されている場合には、上記の趣旨から【補遺〇】を書き加えた。
- ④テキストの(注)は一括して末尾に、各章ごとにまとめて記した。
- ⑤索引(人名、事項そして地名・国名)を注記の後に、独立した形式で付記し、掲載分冊番号とページ数を記した。
- ⑥フリードリヒ3世は1440年2月2日にドイツ国王に選出され、1442年6月17日にアーヘンで即位した。さらに、1452年3月19日にローマで教皇ニコラウス5世(Nicolaus V)の手で皇帝に戴冠された。

第5章 ペーターの死とその後の裁判の行方とチンクの感慨

(1) ペーターの死(1452年)とその死因

他方、ペーターは、判決が下される前に、[すでに]ウィーン市内で(zu Wien in der Stat)死亡し、彼の遺体はここアウクスブルク市に搬送されたのであった。彼の遺体は聖ニコラウス教会(St. Niclaus)に運び込まれたが、同教会での〔埋葬は〕中断させられた。市参事会からの〔埋葬〕許可を取得する必要があったからだ。

以上がペーターの死に関して記された全てであり、1452年に起こった〔出来事である〕。なお、ペーターの遺体が〔アウクスブルク市に〕搬送されたのは同年の10月28日のことであった⁽¹⁾。

【補遺22】 ペーターの死亡した年について⁽²⁾

チンクが記したペーターの死亡した〔1451〕年は実は誤りであり、『ヘクトール・ミューリッヒの都市年代記 (*die Chronik des Hector Müllich 1348-1487*)』に記されている1452年 (*ibid.* S. 145) が正しいと、F・フレンズドルフは主張している。本稿でもこれに従って、1452年説を採用した。

【補遺23】 ペーターの葬式にも意趣返しを行なうアウクスブルク市参事会⁽³⁾

アウクスブルク市参事会は頑迷にも、ペーターに対する法の適用

を字句通りの解釈に固執して、怨み骨髓に徹した。このような法解釈はこの訴訟事件において、極めて不幸〔な結果〕をもたらすことになる。すでに見たように、ペーターは生前、アウクスブルクへの入市を禁止されていたが、死後に至っても依然としてこの禁令は適用されたのである。これは明らかに、市参事会がペーターの遺体および魂に対して侮辱を加えるための行為以外の何ものでもなく、ペーターへの憎しみの強さがうかがわれる。例えば、

「人々はアウクスブルク市参事会の許可を得なければ、物故したペーターの葬式にも参加できなかったほどであった。そればかりか、同市参事会はさらに僧侶たちにペーターの埋葬のために行列をなして墓地〔礼拝堂〕に行かないように要請し、またアウクスブルク市内の全ての名誉ある市民〔貴顕〕たちにも彼の葬式に参加することを禁じるほどであった。さらに都市の役人を、誓約をさせた上で、教会に派遣し、この禁令を破ろうとする人物を監視させるという徹底ぶりであった。」⁽⁴⁾

〔やがて〕その許可もあり、ペーターの遺体は彼の〔、というよりもエゲン家（die Egen）〕専用の（eigen）〔聖アントン〕礼拝堂（St. Antons Kapelle）⁽⁵⁾に運び込まれ、父親〔ロレンツ・エゲン〕が眠る墓に埋葬されたのであった。神よ、彼の魂にお慈悲を。アーメン。

【補遺 24】 ペーターの死因について⁽⁷⁾

すでに早くから、ペーターの死因についても、「ペーターの死は自然死ではない（der Tod sei nicht auf Natülichem Wege erfogt）」という疑惑が持ち上がっていた。そして16世紀のとある年代記の手稿（Handschrift）には「彼はウィーンから皇帝の許に赴こうとした時に、ひそかにロープで絞殺された（haimlich gehenckt an ein wide）」と記されていた。さらに、その手稿の欄外には、「アウクスブルク市民たちが発砲した（die von Augspurg schussen）」とも記されていた。このようなペーターの死因は単なる噂の域を出るものではないが、フレンズドルフはペーター陣営側の「ヴェストファーレン（フェーメグリヒ

ト：Femgericht) 裁判所」⁽⁷⁾ への控訴で、その「フェーメ裁判所」や「同裁判所の権力濫用 (ihre Mißbräuche)」というイメージからくるひそかな恐怖感 (die heheime Schrecken) がアウクスブルク市民たちをペーター殺害へと走らせた主因であると主張している⁽⁸⁾。

(2) ペーターの遺族たちの裁判継承の根拠

【補遺 25】 ペーター亡き後、彼の相続人たちへの皇帝からの召喚状⁽⁹⁾

「ペーターに不利な若干の箇条 (Ettliche Artikel wider den von Argon)」と記された表題の中に、以下のような〔内容〕が挙げられていた。すなわち、「ペーターに不利なケース」とは、まず「皇帝への上訴 (die Appellation) が受理される場合」、次に「皇帝から差し止め状 (verbot-brief) が送付された場合」そして「〔宮廷裁判所への〕召喚状 (ladung) が〔正式に〕ペーター・フォン・アルゴン本人に送付されるか、あるいは本人が途中で死亡した時には、〔その召喚状は〕彼の相続人たちに送付される場合」とある。ペーターに「不利」になるかは別にして、おそらく、彼の相続人たちが父親の訴訟を継承する根拠となったのは、この3番目のケースであり、宮廷裁判所からの召喚状が届いたからであろう。

ところで、ペーターが死亡した時、彼には〔長男の〕アントーニウス (Antonius)、ジギスムント (Sigismund) そしてヤーコプス (Jacobus) という3人の息子がいた⁽¹⁰⁾。この息子たちと彼らの母親 (エリザベート) は〔アウクスブルク市と〕皇帝の宮廷〔裁判所 (bei dem Kaiserichen Hof)〕での裁判を引き継ぎ、そして最後〔の結審に至る〕まで闘うことになった。そして最終的に、ブランデンブルク辺境伯アルブレヒト (Albrechit) の仲介で、両陣営が和解を受け入れるのは、〔ペーターが死亡して7年後の〕1459年2月17日であったのである⁽¹¹⁾。

さて、〔是非とも〕伝えておかねばならないことは、上記の〔裁判〕案件は改めて皇帝の宮廷〔裁判所〕からアンスバハのラント裁判所に差し戻されたこと、また〔そのために〕ペーターの遺族たち (die von Argon) は再び、

裁判の準備をしなければならなくなったこと、そしてその〔判決が下った〕後は、彼らは最後〔死亡する〕まで、その判決に従う〔すなわち、二度と控訴せず、結審とする〕義務を負わされたことである。

今や、両陣営は長きにわたって裁判を介して闘ってきたのだが、〔私ことチンクの視点から見ると〕各陣営は、〔相手陣営が〕裁判所を〔変えて、すなわち、対立陣営と〕異なる裁判所へ告訴しようとする行為を、阻止し、さらに裁判と告訴を繰り返すことによって最初の判決を、それとは異なる判決で捻じ曲げようとしていた〔のではないだろうか〕。つまり、アウクスブルク市民たちとペーターとの対立点は、その対立が生じたのが1451年であったのだが、〔7年後の〕1458年に至るも、どちらの陣営〔の主張〕が正しいのかは、今なお判然としないのである。

（3） この訴訟合戦についてのチンクの感慨

私ことチンクは、私たち市民たちが多くのことを得ていたことを理解していなかった。つまり裁判案件（es）は時々延期された。それに伴って、〔裁判が〕長引けば長引くほど、損失〔不利益〕（Schaden）も、さらには多大な骨折りや労苦そして〔裁判〕費用も（grosse mue, arbeit unt kost）より多く発生する。つまり、確かに、損失を全て引き受け（erben）ねばならない者は誰であれ、〔損失は〕第一審で〔罰金や損害賠償やらを支払って〕結審した方が、〔何回もの裁判を重ねて生じる場合よりも〕その者にとっては有利であろう。またペーターが彼の館〔屋敷〕ないし〔公的な〕宿屋（wirthshaus）に行こうとも、〔どちらの場合であれ〕両陣営にはより大きな利益がもたらされるのであるから、アウクスブルク市民たちもそれを許したであろう。つまり、もしペーターが〔殺害されることなく〕今でも（noch）ひょっとして生存していたとするならば、——〈もちろん、彼は現実には亡くなっているのだが〉——彼の相続人たちは多くの骨折りや労苦そして〔裁判〕費用を減らせたであろうし、またアウクスブルク市民たちも同様であったろう。それにもかかわらず（noch）このような考慮（es）は〔双方がほぼ暫定的に合意していた1451年の〕聖アンドレアスの日（11月29日）

〔のミンデルハイムでの仲裁交渉〕⁽¹²⁾では実行に移されず、それ故に(also)ペーターは様々な訴訟〔合戦〕(Rechten)を強いられる羽目になったのであった。私ことチンクは、アウクスブルク市民たちが事〔の奥にある真実〕を明らかにしてくれることを——〈そのために時間が長くかかろうと、はたまた短かろうとも〉——信じている。

次に、〔是非とも〕伝えておかねばならないことは、ペーターが貨幣調整秤の権利や貨幣〔製造〕権をアウクスブルク司教〔ペーター・フォン・シャウムブルク (Peter von Schaumburg、在位：1424-69年)〕から〔2000フローリン金貨 (fl.)〕で購入したのは1446年のことであった⁽¹³⁾。その時、さらにアウクスブルク市参事会から、貨幣調整秤や貨幣が収容されているこれまでの〔古い〕建物 (Haus) に代わって、新築の建物一棟を租税 (steuer) の代わりに同市に提供するように約束させられた。それ故、今、言及した新築の建物を提供しても、あるいは、その代わりに300フローリン金貨を同市に納付しても、「納税」はどちらでも良いということになろう。

ところで、ペーターがアウクスブルク市に入市する場合、上記したように、彼は〔その都度〕アウクスブルク市に3倍の追加税 (drei nachsteuer) の支払いと、さらに貨幣や秤 (die wag) が収納されている建物の〔維持の〕ために300フローリン金貨の支払いが義務づけられてしまった。

さらに、彼の妻〔エリザベート〕が市参事会 (raut) に赴いて、自分も3倍の追加税と〔建物の維持費〕300フローリン金貨を支払いたい旨、申し出たが、市参事会 (man) は彼女からの徴収を望まず、この件については市参事会はともかくも (überall) ペーター・フォン・アルゴンと正常な関係に至るまで——〈そのような〔正常な関係〕は決して (nimermer) 起こらなかったのであるが〉——そのまま捨て置こうとした。それ故に〔彼女以外の〕アルゴン家の人々 (die von Argon) は全員、今でも (noch) アウクスブルク市に同額〔300フローリン金貨〕の支払い義務を負い、しかもそれ〔の支払い〕に関して、〔価値のない〕ヘラー貨幣 (Heller)⁽¹⁴⁾〔での支払い〕は厳しく禁止されていた。

市参事会 (man) は〔アルゴン家の〕ご婦人方 (die frauen) に対して前約

を破棄して (unpillich) 同額の金銭を改めて家に運び入れる〔戻す〕ことを許可し、彼女たちを〔市民として〕受け入れるそうである。この知らせ (das) 〔を聞いて〕、私ことチンクは満足〔し、同時に安堵〕した。〔というのも、〕ご婦人方が同額の金銭を支払いたいと申し出た時、私ことチンクもその場に同席していたからであった。これは1452年のことであった。

(4) 「評伝」：F・フレンズドルフによるペーターの外交活動

1452年に39/40歳で死去した〔殺害された〕ペーター・フォン・アルゴン是有能で、品行方正な人柄であり、それ故に全ての住民から慕われ、弱冠24/25歳でアウクスブルク市の市長職に就任した。しかし度重なる市長職への就任を強いられたため、自らの商業活動に専念できず、市長職を重荷と感ずるようになる。このような時に、国政上では、国王アルブレヒト2世の突然の死去(1439年)で、1440年にフリードリヒ3世がドイツ国王に選出される⁽¹⁵⁾という大きな変化が生じる。ペーターもその変化の渦に巻き込まれる。すなわち、国王フリードリヒ3世との出会いにより、ペーターの人生は大きく変化するのである。それは、彼がフリードリヒ3世から「貴族身分」に取り立てられ、すでに言及したように「公(都市共同体の秩序)」よりも「私(個人的権利)」の拡充を求めて「市民権の返上事件」を起こし、さらにこの事件の穏便な和解交渉を逸して、本格的な訴訟合戦たる「ペーター・フォン・アルゴン事件」を起こした「悪人」と評されるに至るのである。

しかし、『ブルッカルト・チンク年代記(1368-1468年)』を編纂したF・フレンズドルフは、同『年代記』の弱点として、ペーターが市長在職中の1444年に公務でニュルンベルク帝国議会(Reichstag zu Nürnberg)に参加し、その直後の彼の外交活動を挙げ、チンクはペーターのこの「善行」を欠落させていたと批判している⁽¹⁶⁾。

確かに、この外交活動は『チンク年代記』には記されていない。そのためか、その後の諸々の『アウクスブルク年代記』も、『チンク年代記』に倣って、ペーターのこの外交活動をなぞるだけであったという。この点

から、フレンズドルフは、チンクが見落としたペーターの外交活動の足跡を、自身が収集した史料を基に、その要約を付録VI (Beilagen VI : 「ペーター・フォン・アルゴンの歴史について」 [399-403 ページ])⁽¹⁷⁾ に記したのである。ところで、アウクスブルク市長たるペーターの外交活動とは、1440-46年の「第1次〔古〕チューリヒ戦争」⁽¹⁸⁾ での仲裁裁判官 (1446-47年) のそれであった。

筆者も、フレンズドルフに基づき、この箇所に「評伝」という項目を設けて、ペーターの名誉のために、彼の外交活動の足跡に触れることにする。

(i) ペーターの名を世に知らしめた国王フリードリヒ3世との出会い
すでに言及されたように、1442年に国王フリードリヒ3世がアウクスブルク市を訪問した。そこで、市長たるペーターは同国王を自宅で接待し (1442年4月20-25日)⁽¹⁹⁾、さらにニュルンベルク市まで国王に同行した。国王は5月4日に同市庁舎で開催された〔宮廷〕法廷に臨んだのであった⁽²⁰⁾。

【補遺26】 国王フリードリヒ3世の裁判の背景について⁽²¹⁾

この裁判の背景にはバイエルン大公インゴルシュタット家 (die Herzöge von Bayern-Ingolstadt) の内紛があった。これは1438年の春に発生し、老大公ルートヴィヒ7世 (Ludwig VII : 父) とその息子ルートヴィヒ8世 (Ludwig VIII. der Jungere : 1403年の誕生) の親子の衝突 (Vater-Sohn-Konflikt) であった。

父親 (7世) は息子 (8世) の奇形な体軀⁽²²⁾ を毛嫌いしていたことに一因があるようで、息子が13歳の時 (1416年) に、グライスバハ伯爵領 (Grafschaft Graisbach) 〔ドナウヴェルト市から北東に10kmに位置する僅かな領地〕を自分の支配領地として与えられたが、それも1421/22年 (18/19歳) には戦争で失った。その後、20年にわたる父の移動に伴い、息子は父親の融通の利かない、絶望的な政治にいやいや付き合うことになる。しかし、目下の敵であったバイエルン大公ランツフト家との和解をめざした息子の提案 (1420-22年) や、

また彼の二度にわたる結婚問題（その相手の一人が辺境伯フリードリヒの娘）（1431年：28歳）も父親の頑固さ〔反対〕でつぶされてしまう。逆に、父親は連れ子で、侍従長たるヴィーラント・フォン・フライベルク（Wielant von Freyberg：1400年の誕生）を溺愛し、優遇していたため⁽²³⁾、今や父と息子（8世）の確執はついに公然なものとなってしまう⁽²⁴⁾。若き大公（8世）はバーゼル公会議（1431－49年）でバイエルン大公ランツフート家のハインリヒを相手にした見込みのない再審手続きを開始する義務を負わされたのに対して、この連れ子は諸侯然とした結婚が許され、共同相続人に指名されたそうであった。連れ子はこの件で、若き大公8世が「自分をラント禁令に触れるという理由で、逮捕したがっている」と老大公に告げ口していた。他方、若き大公はインゴルシュタット領内の貴族や市民たちに彼の立場を説明して、彼らの共感を信頼しつつも、数ヵ月間、悩んだ挙句に、ついに反乱⁽²⁵⁾に立ち上がったのである。

若き大公は従兄弟にあたるバイエルン大公ミュンヘン家のアルブレヒト3世と初めての軍事支援の約束を交わし（1438年9月14日）、また辺境伯フリードリヒとその息子たちとノイマルクト同盟（das Neumarktes Bündnis：1438年10月31日）を結んだ。これによって、若き大公（35歳）は辺境伯の娘マルガレータ（Margarete）との婚約、そしてバイエルン戦争（1420－23年）以降、同辺境伯の手中にあったノルトガウとグライスバハの両地方の全所領の返還、それに同辺境伯の今後の支援などの約束を取り付けたのであった。そして決定的な成果は、1438年12月に、父親の老大公がノイブルク市（Neuburg）に逃走した後、首都インゴルシュタット市が中立という口実で、若き大公の勢力傘下に入ったこと、そしてドナウ河沿いの諸都市も首都インゴルシュタット市に倣って若き大公の傘下に与したことであった。

1439年春に、辺境伯アルブレヒト・アキレスの支援の下で計画された、父親が立てこもるノイブルク市への侵攻は、バイエルン大公ミュンヘン家のアルブレヒト3世とミュンヘン市の躊躇もあって、

実行されることはなかった。しかし、国王アルブレヒト2世の平和令が無視された（1439年6月29日）後、対立〔戦争〕が再燃し、老大公側は大敗し、多くの拠点を失った。

そうこうしているうちに、1439年10月20日にドイツ国王アルブレヒト2世が突然の病死とフリードリヒの国王選出（1440年2月2日）で様相は一変した。この変化は老大公（父親）に有利に働いた。老大公は度重なる要請によって、国王から仲裁という提案を国王通知という形で引き出した。そして、4年間の新しい休戦〔停戦〕をもたらした（1440年7月2日）。若き大公もこれには応じざるを得なかった。そして彼も彼の地域の安定を保障するためにラント平和令（Landfrieden）を發布した（1442年11月4日）。その平和令には、係争は国王や帝国の下でのみ決着が付けられることになっていた。しかし国王フリードリヒ3世は成果が上げられない帝国改革計画に専念していたため、他の地方のフェーデ（Fehde：自力救済）に介入する意志はなかったのである。

〔このような政治的な変化の中で、〕ニュルンベルク市での国王フリードリヒ3世の臨席を仰いだ裁判は、バイエルン大公インゴルシュタット家の若きルートヴィヒ8世が代弁者となって彼の義兄弟にあたるブランデンブルク辺境伯アルブレヒト（Albrecht）を伴って出廷し、そしてバイエルン大公インゴルシュタット家の立場から辺境伯アルブレヒトを弁護するためのものであった。〔この問題点は、すなわち〕辺境伯の軍事上の現場司令官たるアルブレヒト・フォン・リートハイム（Albrecht von Rietheim）がどのようにドナウヴェルト市民⁽²⁶⁾たちをアハト〔帝国追放〕刑にしたのかなどを説明して、国王フリードリヒ3世の判断を仰ぐものであった。

その時、ペーターは〔法廷の参審員〕集団の輪に加わり（gieng Peter von Argon in den ring）、その内部で彼の寛大な処置が判決〔発見〕となった（darinne sein Gnade zu gericht satz）。そして、彼には確かに法的資格はなかったのだが（außerhalb des Rechten）、国王にドナウヴェルトの住民たちにそのような無慈悲で、前代未聞の〔アハト刑という〕有罪判決が下らない

ように訴えた。この結果なのか、アウクスブルク市民たちがドナウヴェルト市民たちに伝えたように、果たせるかな（denn auch）ペーター〔の説得ある〕行動で〔国王に有罪判決を思いとどまらせ、ドナウヴェルト市民をアハト刑から救うという〕成果をもたらしたのであった⁽²⁷⁾。

このようにして、彼の噂はおそらく近隣諸地域に広まったものと思われる。そして1444年にニュルンベルク市で開催された帝国議会⁽²⁸⁾に、ペーターはアウクスブルク市を代表して参加した。こうして、彼の名は在外外交官たちを介してアウクスブルク市の枠組みを超えて、広く知られるところとなった。そして彼自身は請われる形でチューリヒ（Zürich）と盟約者団（Eidgenossen）との仲裁役を引き受ける羽目になった。これは1446－47年のことである。

（ii） 1440－46年の第1次チューリヒ戦争と

アウクスブルク市の関係⁽²⁹⁾

ところで、南ドイツ地方の帝国諸都市（die Reichsstädte）は帝国都市チューリヒと盟約者団との間で1439年以降に発生した対立（Streit）に並々ならぬ関心を寄せていた。その帝国諸都市のうちでも、先頭に立っていたのがアウクスブルク市であった。

1444年のレターレ（Lätäre：3月22日）にコンスタンツ司教（Bischof von Konstanz）が双方の陣営を調停しようとバーデンで（zu Baden）仲裁会議を開催した。この時、帝国諸都市の使者たちも同会議に列席した。アウクスブルク市からも〔元市長の〕シュテファン・ハンゲノール（Stefan Hangenor）が盟約者団側の陣営に、また〔元市長の〕ウルリヒ・レーリンガー（Ulrich Rehlinger）がハプスブルク家とチューリヒ市などの帝国都市側の陣営に加わっていた。

同年8月27日付の1通の書面で、アウクスブルク市の市参事会はバーゼル市民たち⁽³⁰⁾に盟約者団とチューリヒ市との対立をめぐって、双方から何らかの不正行為（Umglimpf）が話題に上がった場合には、〔1444年の〕ニュルンベルク帝国議会でバーゼル市民のために力を尽くす旨、約束していた。そして、アウクスブルク市参事会は、上記のニュルンベルク帝

国議会が開催されると、アウクスブルク市の外交使節にふさわしい市長ペーター・フォン・アルゴンを派遣する旨、発令した。これ以降、アウクスブルク市の使節（Botschaft）がスイスに出入りするようになった。〔例えば〕1444年の秋頃〔10月9日〕には、シュテファン・ハングノールがスイスに滞在していたし、また1445年の聖マルチン祭（11月11日）には選帝侯（Kurfürsten）たちが計画した会議にもアウクスブルク市の使節が出席していた。またコンスタンツ市で、宮中伯ルートヴィヒ（Pfalzgraf Ludwig）の仲介で行なわれた交渉（1446年5月16日－6月9日）にも参加していた。〔それ故に〕調停の実現に〔できるだけ〕尽力しようとした最初の人物たち〔はアウクスブルク市民たち〕であったと言える。

（iii）コンスタンツの仲裁交渉の決裂と

ペーターへの仲裁裁判官就任の要請⁽³¹⁾

ところで、この〔コンスタンツでの〕交渉では〔まずもって〕対立する諸問題の解決は、チューリヒ陣営からと盟約者団陣営から選出されたそれぞれ2名の、計4名〔の代表者〕からなる仲裁会談（Schiedgericht）に一任することが合意されていた。しかし、この「和解手続き規定（der Anlaßbrief）」には、さらに〔もう一項〕、すなわち、もしこれら4名の主張がそれぞれ一致せず、または一つの共通合意に至らなかった場合には、これら4名はそれぞれ宣誓の上、4名が〔信頼に足ると〕共通認識できる、——〈ただし盟約者団はその被選出者から除くのだが〉——帝国都市出身の一人の人物を〔仲裁裁判官（Obmannschaft）として〕選出すべきこと、という入念な取り決め事項が設定されてあった。

さて、選出された〔4人の〕仲裁〔代表〕者（Schiedmänner）たちとは、具体的に〔まず〕、盟約者団（von Schwiez）陣営からはペーターマン・ゴールドシュミット・フォン・ルツェルン（Petermann Goldschmidt von Luzern）とイタール・レーディング2世（Jtal Reding der Jungere）の2名、そしてチューリヒ陣営（von Zürich）からはハインリヒ・エッフィンガー（Heinrich Effinger）とルードルフ・フォン・カム（Rudolf von Cham）の2名であった。

彼らは7月末日にカイザーシュトゥール（Kaiserstuhl）に集い⁽³²⁾、そして

両陣営の訴え (Klage) とその返答 (Antwort) および反論 (Wiederrede)、〔相手側への〕 誹謗・中傷 (Nachrede) そして決議 (Beschließen) などを尋問したが、〔一つの共通合意には至らず〕 そのため〔1446年の〕 9月27日に、この案件につき〔特例事項の〕 決定を下すことになったのである。つまり、〔上記の〕 「和解手続き規定」 の設定で予測されていたことが現実のことになったのである。すなわち、4人の仲裁〔代表〕 者たち (die Zusatzleute)⁽³³⁾ の判断が大きく分かれたのであった。〔例えば〕 チューリヒ陣営の2名の仲裁〔代表〕 者たちは、「盟約者団たちは彼らの訴えについて、法に照らして、チューリヒ市民たちに十分に答えるべきである」と主張していたのに対して、盟約者団陣営の2名の仲裁〔代表〕 者たちは、「チューリヒ市民たちは以前、盟約者団と締結した約定 (Verträge) を遵守し、そしてその中で定められた法手続きに従うべきである」と主張していたからであった。

このため、〔両陣営が一致して信頼できる〕 一人の仲裁裁判官 (ein gemeine Mann) を選出する必要が生じ、上記の4名の仲裁〔代表〕 者たちはアウクスブルク市長ペーター・フォン・アルゴンを選出したのである。

盟約者団の使者たちは直ちにアウクスブルク市参事会に「ペーター殿を仲裁裁判官 (Obmannschaft) に選出したのだが、この任務を引き受け、尽力してくださるまいか」と打診しにきた。彼らが正しく予想したように、ペーターは〔初めは〕 彼らの願いを頑なに拒み続け、そしてその任務の辞退を願い出たのだが、諸侯たち (Fürsten) や領主たち (Herren) そして諸都市、特にアウクスブルク市参事会にも説き伏せられて、〔とうとう〕 最後にはその「仲裁裁判官 (die Gemeinschaft)」 の役割を引き受ける羽目に至ったのであった。全能なる神に称えあれ！ また特に平和と団結のために、神聖ローマ帝国に名誉を与え給え！

(iv) 仲裁裁判官としてペーターが下した

リンダウ判決 (1447年2月28日)⁽³⁴⁾

ペーターは1446年12月5日にリンダウで (zu Lindau) 仲裁裁判会議を開催する旨、両陣営に伝え、両陣営から同意書 (Verwilligungsbrief) を取り付けた。その後、彼に全ての必要な証書の認証 (Vidimus) が与えられ

ることになり、ペーターは彼が望む所に、しかも何回でも〔調査のために〕訪ねたり、また考察したりすることが許された。〔その結果〕両陣営間の穏便な調停を試みる事が可能となった。そして12月8日にリンダウ市の市参事会の大広間 (Ratsstube) で同年6月9日〔のコンスタンツ交渉会談〕の「和解手続き規定」で求められていた宣誓を行なった⁽³⁵⁾。

ペーターは両陣営から求められていた〔仲裁 (約定)〕と、また前の〔カイザーシュトゥールでの〕会談で言及された訴えとその反論、そしてそこで下された決議 (判断) を幾度も読み返し、そして実際に十分なる注意を払って検討を重ねた。さらに、公正や正義 (Gerechtigkeit) を好み、法律 (Recht) に精通していた多くの敬虔な人々、すなわち聖界関係者 (Geistlicher) や貴族 (Adler)、学識者 (gelerter) そして賢人 (Weiser Leüte) と称される優れた人々に相談を持ち掛けた後、ペーターは〔改めて〕自分の理性 (Vernunft) や悟性 (Verständnis) をはたらかせて自らも熟考を重ねた。〔こうして〕彼は両陣営に〔自らが判決を下す〕日取りを、リンダウ会談 (1446年12月5日) 後の、1447年2月28日と定め、自らの判決 (Spruch) を〔以下のように〕表明したのであった。すなわち、

「〔リンダウ裁定で〕主要な案件 (die Hauptsachen) が両陣営によって正当と認められた後も、その和解〔妥協〕案 (Anlaß) には、以前のように (vor)、何らかの法を用いて〔相手側の粗 (あら) を探し、禁じられていた〕この主要案件〔の内容〕の詮索を厳守せずに〔逆に、破って〕、各陣営がおそらく新・旧の同盟ないしはそれ以外の同盟などを盾にして言い訳をする (fürwänden) こともできたであろうが、しかし、特に、チューリヒ陣営の仲裁〔代表〕者たちは彼らの判断 (Urteil) に関して、主要案件に有利になり得ることなどは一切主張しなかった。

そこで、私ことペーターはこの件に関して誓約していた誓いをした上で、以下のように宣告するものなり。すなわち、

『私はこの判決に関して幾度も協議〔や相談〕を重ねた後も、自分自身でも熟慮を重ね、以下のように判決を発見するに至った。

それは、盟約者団陣営の仲裁〔代表〕者たるペーターマン・ゴールド

シュミットとイタール・レーディング2世らが訴えと反論〔の審問〕で言及した判決（die Urteil）が、法〔裁判〕の形式と形態から判断すれば（nach form und gestalt des rechten）より優れた、そして正当なものである』と⁽³⁶⁾。

ペーター・フォン・アルゴンの判決〔文〕（den Spruch）は当初から、正式な裁判文書形式から民衆（世俗）語（die volkstümliche Spruch）に翻訳する必要はなかった。なぜなら、当時の年代記作家や文筆家たちが、仲裁裁判官（der Obmann）たるペーター本人は「チューリヒ市民（Zürich）はスイス人（die Schweizer）の許に留まる運命にある、ないしは、チューリヒ市民は再びスイス人になる運命にある」ことを認識している、と語った時に、すでにこのこと〔das：翻訳〕は行なわれていたからである。

（v）ペーターの判決に対する同時代人の様々な報告

〔A〕 盟約者団側に理解を示す報告

（1）アウクスブルク市の「年代記作家」たる

ヘクトール・ミイーリヒの報告⁽³⁷⁾

ミイーリヒ（H. Müllich）はチンクと同時代人で、彼の『年代記』の中（88ページ）で、次のように記していた。すなわち、

「ペーターはつまり『チューリヒ市民たちが再び、盟約者団と、かつて（vor zeiten）彼ら双方がそうであったように、——〈しかし、〔実際には〕その同盟関係（was）はうまくいっていなかったのだが〉——同盟関係を結ぶことになるであろう』と語った」と。

（2）ストラスブルク市の年代記資料（Archivcronik）の報告⁽³⁸⁾

「両陣営はペーター・アルゴンというアウクスブルク市民を、双方の一致した仲裁裁判官（ein gemeiner obman）と定め、この件をペーターに受諾するようしきりに頼み込んでいた。もし彼がその受諾を洩るようであれば、両陣営は彼がこの裁判案件から作り出したものが何であれ（was）それを受諾するために、神や聖人たちに（gott u. den heiligen）誓約までしたであろう。〔その効果があったのか〕ペーターは受諾したのであった。そして、彼はこの案件を他の賢人たちと協議を重ね、そして両陣営の新・

旧の同盟証書 (ihr bundtbrief neu u. alt) を検討した。そこで、ペーターは自ら宣誓した上で、次のことを正当と認め〔判断し〕た。すなわち、

「チューリヒ市民たちは、新・旧2つの同盟証書から判断すると、スイス人 (die Schweitzren) の許に留まるべきである。この場合 (do) チューリヒ市民たちは再びスイス人に、そして盟約者団〔の一員〕になったのである」と。

それ故に、人々はペーターがこの〔仲裁裁判の〕結末の軍配を盟約者団に上げたことで満足していた。

〔しかし、他方〕チューリヒ市民たちはこの件ではほとんど喜んではいなかった。

[B] チューリヒ市民側に理解を示す報告

(3) チューリヒ年代記作家のエドリバハ (Edlibach) の報告⁽³⁹⁾

彼はいまだに (noch) 続くいささか陰悪な混乱をこのリンダウ宣告から生じた現象と見なして〔以下のように記して〕いた。

「チューリヒ市民たち (die von Zürich) は〔ペーターが下した判決を〕驚きをもって受け取った。全ての現地人もまた〔チューリヒ陣営の〕騎士たち (alle eignossen u. rette mencklichen) も同様であった。ペーターが私たち〔帝国都市〕チューリヒ⁽⁴⁰⁾〔という長い名称〕をスイス人 (die Schwentz) と法的にも〔短い名称に〕縮め、スイス人と結び付けたあの〔リンダウ宣言〕時の極めて陰悪な状態 (vil böser) よりは、今は穏やかになった。スイス人とまったく異なる〔人と認識する〕私たち〔帝国都市の〕市民たるチューリヒ人は〔確かに〕以前よりもスイス人に依存しなければならないのである」と。

(4) チューリヒ生まれでウルム市の

ドミニコ会派の僧フェリクス・ファーブリの報告⁽⁴¹⁾

彼フェリクス・ファーブリ (der Ulmer Dominicaner Felix Fabri) は次のように語っていた。すなわち、

「しかし、この判決がチューリヒ (Thuregi) に伝えられるや否や、平民たち (plebes) の間では〔至る所から〕号泣や、悲痛の叫びが何と大きく起

こったことか。私はほとんど〔不満の〕眩きや悲嘆を口にするとはなかった。なぜならば、私は〔当時〕おそらく8歳ないし9歳のほんの子どもであったからである。しかしその私でも、チューリヒ市から〔北に約38km〕離れた、デーセンホーヘン（Dysenhofen）にいた時に、チューリヒ人（Thuricensen）がまさにスイス人（Swicerus）になろうとすることを（Swiceros fore factos）耳にした時には、涙を流した（fleui）。その理由は、その当時（tam）〔スイスの〕至る所でチューリヒ人がスイス人と呼ばれるという予想だにしない変化は、全ての人々にとって驚愕以外の何ものでなかったからであった（omnibus stupor fuit）」と。

（vi） 対立の最終合意（1447年4月1日のバーデン・シュタット会談）⁽⁴²⁾

ペーターは1447年2月28日の〔リンダウ会談の仲裁〕判決をもって、自分の役割が終了したなどとは決して思っていなかった。両陣営はペーターと5つの帝国都市〈バーゼル市、コンスタンツ市、シャッフハウゼン市（Schaffhausen）、ラーフェンスブルク市（Ravensburg）そしてロットヴァイル市（Rotweil）〉出身の5名の代表者（Manner）たちの立会いの下で、依然として残っている諸々の対立点の良き落としどころ（和解：ein gutlicher Austrag）を探し出し、さらに仲裁判決に従って、統合を回復しうる方法を示すべく、合意した。〔そのために〕1447年4月1日にバーデン・シュタット（Baden Stadt）で和平会議（ein gutlicher Tag）が開催され、6人の仲裁裁判官たち（die sechs Tädingsleute）が両陣営を以下のように合意させたのである。すなわち、各陣営は、2名の代表者〔仲裁者〕たちにもたらされた全ての案件を、同盟証書の内容に従い、ミンネ（中世騎士の代償を求めない愛：Minne）⁽⁴³⁾あるいは法（Recht）でもって決定すべく、仲裁裁判のために、彼らを〔チューリッヒ市から南東に30kmに位置する〕アインジデル（Einsiedeln）に派遣した。

仲裁裁判所が取り扱うことになる主要な問題〔案件〕として挙げたのは、

- ①チューリヒとオーストリア（Oesterreich）との同盟（der Bund）
- ②盟約者団によって行なわれた征服（Eroberungen）行為
- ③損害賠償と負担（戦費）賠償（die Schdens = und Kostenersatz）の要求

の3点である。

4人の仲裁者たち（die vier Schiedleute）は〔この3点に関して〕同意が得られなかったので、彼らは盟約者団から1人の仲裁裁判官（Obmann）を選出する〔義務〕が発生したが、この件についても合意には至らなかった。そこで、盟約者団以外から、すなわち帝国都市から1人の仲裁裁判官を選出することが〔提案され〕、この件では一致をみた。

この最後の件では、両陣営が一つの妥協（concession）をし、〔その結果〕ペーター・フォン・アルゴンがその名声により、〔本来ならば〕盟約者団から選出されるべき仲裁裁判官の地位を奪う形で選出されたのである。

ペーター・フォン・アルゴンは「チューリヒと盟約者団との間でのリンダウ会談（1447年2月28日）とバーデン・シュタット会談（1447年4月1日）でほとんど全ての問題点を解決した」後、復活祭の第1週（Osterwoche：4月10日）にアウクスブルク市に帰還した⁽⁴⁴⁾。

これを受け、アウクスブルク市参事会は翌11日にニュルンベルク市参事会宛てに書簡を作成し、そしてペーターが持参した仲裁裁判文書の写し（eine Abschrift der Tadigungsbrief）を送付した⁽⁴⁵⁾。

なお、アウクスブルク市の1447年度版「出納帳簿（Baurechnungen）」には、4月16日に、盟約者団の案件に関して、ペーター・フォン・アルゴンに支払った金額は、①60グルデン（guld.）〔その内訳は12日分の旅費、13頭の馬の代金〕と②102グルデン〔その内訳は34日分の旅費、7頭の馬の代金〕である⁽⁴⁶⁾。

最後に、F・フレンズドルフはヨハネス・フォン・ミュラー（Joh. von Müller）の次のような文章で、すなわち、「ペーターは〔もし、生きておれば〕、忍耐と英知、それに公平さをもって交渉にあたり、そしてやり遂げた〔チューリヒ市と盟約者団の、二度にわたる仲裁裁判官という〕大役（das vollbrachte Werk）を満足げに回顧したかもしれない。そして、さらに数百年が経過しても、スイスの歴史家はなお、感謝の念をもって、ペーター〔が成し遂げた仲裁〕の思い出を新たにしていた。」⁽⁴⁷⁾ という引用文で結んでいた。